

「ひとりぼっち回避規範」に関する一考察

大嶽さと子¹⁾ 吉田俊和¹⁾

学校生活における女子友人グループの特徴

学校生活における青年期の友人関係については、松井(1990)や藤田・伊藤・坂口(1996)、長沼・落合(1998)など、数多くの研究がなされてきた。これらの研究は、さまざまな視点に基づいて検討されているが、最近10年間ほどの研究では、佐藤(1995)や三好(1998)など、女子友人グループに着目したものがいくつかみられるようになってきている。女子の同性友人グループの特徴は、「多くの女の子たちが学校生活の中で特定の同性友人グループに属し、多くの時間を決まったメンバーと固まって過ごしている(三好, 1998)」とされる。また、その行動特徴としては、特別教室での授業の際に、一緒に教室を移動したり、休み時間に連れ添ってトイレに行ったり、昼休みには机を寄せ合って弁当を食べたりしている、ということが挙げられている。さらに、女子友人グループは、こういった親密な行動特徴があるだけでなく、他のグループ成員を全く受け入れない、といった排他性も見受けられ(三島, 2003)、このような女子の「グループ化問題」については、教師からの介入・指導の難しさ、また、学級運営への影響といった点からも指摘されている(中村, 1998; 岡崎, 1998; 酒井, 1998; ヴィヒャルト, 1998)。

これまでの青年期の友人関係に関する知見によると、友人関係を形成・維持していく中で、同性友人に求めるものに関しては、男子と女子とでは異なるものとされている。例えば、Sherrod(1989)では、男子が興味や関心が同じである人を親友として求めるのに対し、女子は物事について同じように感じてくれる人を親友として求めると指摘されている。友人との関わり方についても、男子は自分に自信を持ち、友人と自分とは異なる独立した存在であることを認識する関係、女子は友人と理解しあい、共感し、共鳴し合うといった、お互いがひとつになるような関係を望む(落合・佐藤, 1996)とされ、こ

れに関しても性差が認められている。三好(2006)は、これらの研究を概観し、同性友人関係の性差は、男子が個々の興味や関心を共有する形で成り立つのに対し、女子はより感情レベルの一体感に基づく、固定的な質のものであると結論付けている。そのため、上述の親密かつ排他的な行動特徴は、一体感のある関わりを希求する女子特有のものであると考えられる。

また、青年期は、子どもから大人へと移行する時期でもあり、愛着対象も、親や家族などから同年代の同性との間と変化していく時期でもある。そのため、こうした関係性が、心理的な安定や学校での適応に大きく寄与していることは、学校現場においてもよく知られていることである(三好, 2006)。青年期後半の大学生では、同性からさらに異性へと愛着対象が移行するという知見(酒井, 2001)も見受けられるが、発達の視点から心理的居場所感について検討した則定(2008)の知見において、発達段階に関係なく一貫して親友が重要な他者として機能していることが指摘されており、青年期を通して円滑な友人関係を築くことが、精神的健康を規定する要因となっているといえよう。

このような友人グループを青年期女子がなぜ形成するのかという点については、「1人で浮いた存在になりたくないから、また、複数の友人に支えられようとして、グループに所属している。グループは、お互いに自分の安全を高めようという、どちらかという防衛的な目的のために維持されている」とされる(佐藤, 1995)。また、友人グループに所属する理由としては「複数の友人に支えられたいから」とされ、複数であるからこそ得られる、道具的、あるいは情緒的サポートの量的な充足を指していると思われる。これは同性友人グループに所属する、いわばポジティブな理由であると考えられる。しかし一方で、グループを維持する理由としては、「一人で浮いた存在になりたくないから」という点が挙げられ、この点に関しては、ポジティブな理由であるとは考えがたい。むしろ「一人過ごすことによって浮いた存在になってしまうという状態を避けるため、そうせざるを得ない

1) 名古屋大学大学院教育発達科学研究科

から」というネガティブな理由であるとも考えられる。

「一人で浮いた存在になりたくない」ということ

「一人で浮いた存在になりたくない」ためにグループに所属していたいという傾向に関連して、町沢(2002)は、女性会社員や女子大学生の昼食時間に着目し、「職場や学校などにおいて、一緒に食事をする人がいないことに対して恐怖を感じる」という症状を、「ランチメイト症候群」と名づけた。現代の日本社会では、食事が単なる栄養摂取の場というだけでなく、社交の場としての意味を持ち、相手との親交を深める場として機能している(佐藤・畑山, 2002)。特にわが国では、「同じ釜のめしを食う」という諺にもみられるように、一緒に食事することは心を分かち合うことであるとされ、親密であることを確認したり、親密になる契機となったりするという意味がある。広く捉えるのならば、政治家や一般企業による接待もその一種であり、何かの方向性を決める時や商談をまとめる場合に、一緒に食事をするのでスムーズに執り行おうとする習慣は古くから見られた(町沢, 2001)。南部・天野・小野(2002)においても、親しい友人との食事において、食欲という生理的欲求を満たす目的以外に、会話を交わすという目的が確認されており、いわゆる社交の場としての機能をもつことがうかがわれる。そのため、学校や職場などで、昼食時間に一人で食事をするというのは、社交の場としての機能が働いていない、つまり親交を深める相手がいない、ということになる。

また、佐藤ら(2002)の研究では、昼食時間への不安が高い学生は、社会的スキルが低く、昼食時間の過ごし方への満足度も低いことが明らかとなった。さらに町沢(2002)において、「ランチメイト症候群」とみられるある女性会社員は、「一人で食事をするということは、友達がいなくて、ネクラである、集団に入れない、ということになり、それはとても辛いことなのです」と述べている。中学・高校生においても、「グループごとに机を寄せ合って食事をする。食事をいっしょにできる相手がいるということは非常に重要であり、そのためにグループがあるともいえる(佐野, 1988)」と述べられている。以上のことから、一人で食事をとるという行為は、行為そのものを他者に見られることで、「一人でいるような人」=「友達がいなくて、ネクラである、集団に入れない」といったネガティブな認知を他者からなされてしまうのではないか、という不安が行為者自身に喚起され、脅かすのだと予測される。

「社会的動物」としての人間

古代ギリシャの哲学者アリストテレスは、人間はどんな時代にも社会を形成し、社会の中で生きてきたという点に目を向け、「人間は『社会的動物』である」と考えた。元来人間というものは、社会生活を営み、集団を形成することにより、集団と関わり合って生きている。人間は一個体としてひとたび生を受けると、家族、学校、職場といった何らかの集団に所属することになる。そして、食べ物や言語、思考などに関して、その集団における習慣や規範に従って生きていく。そういった中で、人間は、集団という形で群れをなし、助け合ったり、協力し合ったりという互いに利益をこうむるような関わり合いをもつことになる。また時には、食料を奪い合ったり、他人と争ったりといった、互いにとって必ずしも利益とならないようなことでさえも、視点を変えれば、関わりあうという関係を成立させていることになる。このように自分自身と他者とが関わりあっていく関係の中で、人間同士の根本的な結びつきを感じるのである。

アリストテレスが述べた、「人間は『社会的動物』である」という言葉に関しては、これまで多くの議論がなされてきた。心理学においても集団への所属に関する研究として比較的広く知られているものに、Maslow(1954)の「所属と愛情の欲求」がある。彼は、人間の動機や欲求を捉えた人格理論として欲求階層説を提唱しており、「所属と愛情の欲求」は、このうちの生理的欲求と安全欲求とが満たされた後の、さらに高次の欲求として捉えられている。人間が生を全うする中で、最終的に自己実現という欲求にたどりつくためには、この「所属と愛情の欲求」、つまり集団に所属し関わり合っていきたいという欲求は、避けては通れないものの一つなのである。

また、Maslow(1954)の理論よりも比較的新しいものとしてはBaumeister & Leary(1995)のneed to belong理論がある。この理論の根源は、「われわれの視点は、所属の確立と維持に駆り立てられた存在として人類を描き出すものである」というものである。つまり、人間が生得的にもつ欲求として社会や集団に所属し、そうすることによって食料を得、子孫を増やし、適応することで生き延びてきた、という視点から人間行動を理解していこうとするものである。このneed to belong理論が社会生活の根底にあるとすれば、集団に所属せず、一人で過ごすということは、生得的にもつ欲求に反した行為であり、欲求に反しているがために、社会的に不自然な状態ということになる。このため、一人で過ごすという行為に対する不安が喚起されてしまうとも考えられる。

特に青年期においては、自分自身について深く考える時期であり、それと同時に自分の周りの人間や環境についても深く考える時期でもある（小畑・伊藤，2001）。自分自身について深く考え、自己形成を図るという意味においても、社会生活を営む日常的な「居場所」、つまり自分がそこにいることが許される集団の存在が重要になると考えられる。

集団規範の形成

このように、人間は集団に所属し、環境と相互作用しながら社会生活を営んでいく。その中で形成されるものの一つとして、集団規範がある。規範とは、個人の欲求を超えた部分で他者と共有される社会性があり、しかも個人に内面化されているものである（園田・井田・加藤，1996）。また、社会集団において望ましいとされるような一般的な期待があるともされる（Staub，1972）。この望ましいとされるような行動基準は、社会集団ごとに、状況に依存して形成され、学校という社会においては、学校そのもの、さらにはクラスやクラス内の友人グループといった集団内で円滑な社会生活が営めるよう、各集団に固有に、さまざまな集団規範が形成されることになる。この時、そもそも集団に所属しようとする need to belong が集団内の各成員に共通して存在するのならば、「集団に所属することが望ましい」という所属集団の在り方が認識される。そういった過程を経て、所属する集団の中に「誰かと一緒にいなくてはいけない、一人ぼっちではいけない」と考えるような、対人関係における一種の集団規範が形成されることになると思われる。そのような集団規範を持ち合わせているがために、一人で過ごしている人に対して、嘲笑や制裁が加えられる可能性のある人物というネガティブな認知をし、さらには自分自身が同様のネガティブな認知を他者からされないようにと、一人で行動することをできる限り回避しようとすることになるのであろう。そのために、規範はより強固な規範となって機能し続け、学校生活においては、日常的に一緒に行動するようなグループに是が非でも所属しようとする行動をよりいっそう活性化させるのではないと思われる。

「ひとりぼっち回避規範」という視点

上述のように、青年期女子が特定の友人グループを形成し、多くの時間をメンバーと固まって過ごしているという現象は学校生活においてよく見られる現象であり、極めて自然に生起するもののように思われる。つまり、学校生活において友人グループが存在するのはあたりまえのことといえる。しかし、現実場面では、町沢（2002）

がランチメイト症候群として指摘するように、友人グループに所属していない、もしくは所属することができない少数派も存在し、一緒に過ごす人がいないがゆえに不登校になったり、社会的な不適応感を感じたりしている者もいる。友人グループに所属しておらず、それゆえに不適応感に苛まれてしまう者は、社会的動物として人間がとる「共行動」について、現実場面以上に過敏に認知しているのかもしれない。そういった者にとって、誰も一緒に過ごす人がいないということは後ろ指をさされるような不安な状態であり、過剰に「誰かと一緒にいなくてはいけない」という、ある意味では強迫的な観念に捉われてしまうのだと思われる。

上述のように、所属する集団の中に存在している、「無理にでも友だちを作り、一緒にいなくてはいけない」と考える規範意識を、大嶽（2007）は「ひとりぼっち回避規範」として指摘している。「ひとりぼっち回避規範」を高くもつ者は、集団に所属するというだけで個人の need to belong は満たされることになる。そういった視点から考えれば、所属する友人グループが存在することで、当該環境における適応感がある程度保障されることになる。しかし、たとえ友人グループに所属したとしても、所属した友人グループが、必ずしも安住の地とは呼べないこともある。例えば、「ひとりぼっち回避規範」が過剰に高いと、対人場面で不安が生じやすくなり、友人グループ内で是が非でもうまく関わっていかうということを意識する。そのためグループに所属していてもストレスフルな状態に陥り、その人にとっての学校適応感を揺るがす一因となるからである。

また、女子友人グループ内では、集団内いじめが存在することもあるという指摘もある。これについて、三島（1997）は、『集団内いじめ』は、小学校高学年の女子に多くみられる『いじめ』である。小学校高学年の女子に限らず、高親密性・高排他性という特徴をもったインフォーマル集団があれば、そこに『集団内いじめ』が発生する可能性は高い」と述べている。その代表例として、2004年6月に長崎市で起きた小6女児殺人事件が記憶に新しい。小学6年生の女児が、同級生の女児をカッターナイフで殺害するという、国民全体に衝撃を与えた事件であった。加害者の女児と殺害された女児とは、同じクラスの、同じ女子友人グループのメンバーだった。普段から一緒にバスケットボール部に所属したり、交換日記をしたり、お互いのHPに書き込みをしたりといった親密性の高い行動が、双方の親を含め、周囲の誰からも認識されていた（朝日新聞西部本社，2005）。しかし、客観的に見れば、確かに二人は親密であり、同じ友人グループに所属していたようではあったものの、その関係

は徐々にこじれていったのである。直接的な原因としては、被害女兒による加害女兒のホームページへの書き込み内容にあったとされているが、その内容をめぐって、加害女兒は被害女兒を恨み、殺人事件に発展するまでに至った。排他性が高いがゆえに、グループ以外の人間には誰も事前に加害女兒の心の葛藤を察知することはできず、殺人事件にまで発展して初めて、その様相が浮き彫りとなった。高親密性・高排他性という、同性友人グループの特徴があるがゆえに、第三者ではグループ内の関係性までは把握しきれなかった、ということなのだろう。そして、被害女兒・加害女兒ともに、トラブルが生じていることを認識しながらも、「ひとりぼっち回避規範」の存在により、グループ内にとどまり続けざるを得なかったのである。

こういった現象は、青年期の学校生活に限ったことではない。たとえば、本山(1995)によると、自らの子育て体験から、子どもを連れて公園へ遊びに行っても、そこにはすでに母親グループが形成されており、グループに所属していない母親は公園内で浮き上がってしまい、居場所感のなさを感じるという。また、母親グループに入ったとしても、日常から行動をともし、グループ内では個々人の違いを認めない同調傾向がみられたという。これは、青年期の女子友人関係に関する研究で指摘されている高親密性・高排他性という特徴をもつ関わり方となら変わりはない。

「1人で浮いた存在になりたくない」という、ネガティブな理由で同性友人グループに所属するのならば、グループに所属しているという事実だけでその意義をある程度見出すことができる。それが故に、高親密性・高排他性という特徴をもつグループ内に、是が非でもとどまろうとする傾向があると思われる。そのため、グループ内のメンバーとたとえうまく関わりあえなくても、孤立し切り捨てられてしまうことへの恐れから、友人グループに所属し続けるのである。そしてこのような友人グループは、排他性が高く、いったん所属したグループから他のグループへ移動することは容易ではない。友人グループ内でたとえいじめられ、いためつけられても、そのグループにとどまり続ける理由としては、一つには仲間から孤立し、切り捨てられることへの恐れがはたらいているともいえる(森田・清水, 1994)。そう考えれば、友人グループに所属していたとしても、円滑な人間関係が築けず、適応感が得られていないという状態に陥る理由も理解できる。「ひとりぼっち回避規範」によって友人グループに所属することで、「一緒にいる人がいる」という安心感が得られ、適応感はひとたび高まるが、その後の学校生活の中で孤立しないようにと友人グループ

内のメンバーに過剰に気を配り、その結果ストレスの高い状態に晒されてしまうということになる。

以上のことから、これまでの学校現場においては、友人グループに所属している生徒に対してよりも、友人グループに入らず一人で過ごしている生徒に対して、誰か一緒に過ごす人が見つかるように促すという指導がなされるが多かったが、必ずしもそういった方策のみを行えばそれでよいとは限らない場合もあるということが考えられる。また、保護者の認識においても、我が子に友人がいるかいないかという点だけが懸念され、友人グループの中でどのように関わっているかといった視点にはこれまであまり目が向けられてこなかったという現状がある。

「ひとりぼっち回避規範」の周辺概念について

上述のような意味からも、「ひとりぼっち回避規範」という視点から学校現場における友人関係を把握する意義があると思われる。ここで、「ひとりぼっち回避規範」の周辺を取り巻く諸概念について、「ひとりぼっち回避規範」との相違点をまとめておく。

(1) 親和動機 「ひとりぼっち回避規範」に比較的近いと思われる概念の1つとして、親和動機がある。親和動機とは、他者と友好的な関係を成立させ、それを維持したいという社会的動機のことである(Murray, 1938)。親和動機の強い人の行動特性としては、よく電話をかけたり手紙を書いたりする、他者にしばしば承認を求める、友好的状況を好み、アイコンタクトが多いなどが挙げられる(Wong & Csikszentmihalyi, 1991)。そういった意味から考えれば、「この人と一緒にいたい」といった具体的な対象が存在する動機である。しかし、「ひとりぼっち回避規範」においては、「一人でいてはならない」ということが重要視され、対象は「誰か」であり、特定の他者を指してはいない、ということになろう。また、Murray(1938)における親和動機は、他者と友好的な関係を成立させ、維持したいというポジティブな側面を持つが、本研究における「ひとりぼっち回避規範」は、実際にある特定の他者との対人関係を成立させたいかどうかという欲求面とは次元が異なり、「誰かと一緒にいなくてはいけない」という、感情を超えた行動規範ということになる。

(2) 評価懸念 また、「ひとりぼっち回避規範」は、一人でいることによって他者からネガティブな認知をされることを恐れるがために生じる規範であるため、評価懸念も近い概念として想定できる。評価懸念とは、Watson & Friend(1969)によると、「他者からの評価に対する心配や、否定的に評価されるのではないかという

予測に対する苦痛や心配の程度」と定義される。これに関して、山本・田上（2001）は、自分自身の行為について「悪く評価されるかもしれない」と過剰に気にしてしまう者にとって、学校は自由に自己を表現できる場所とはなりにくいと述べている。評価懸念の高い者は、学校という社会的な環境がもつ価値観を敏感に察知し、たとえ不本意であっても相手に合わせるという行動をとってしまう。そのため、第三者から見ればその行動は不適応的ではなかったとしても、本人はつらさや疲れを感じ、学校適応感の高さが維持できない可能性が予測される。また、その場合、その本人の過剰適応的な行動を第三者が肯定的に評価すれば、ますますその行動をとり続けると思われる（山本，2007）。そういった点から、「ひとりぼっち回避規範」は、評価懸念という認知的な敏感さから生じる苦痛や心配がもとになり、「誰かといつも一緒にいなければならない」という集団規範として存在すると解釈できる。

(3) 公的自己意識 青年期は、自分がどのように他者からみられているかという、自己の外的側面への意識、すなわち公的自己意識が徐々に高まっていく時期でもある。公的自己意識は、菅原（1984）によると、「自己の服装や髪型、あるいは他者に対する言動など、他者が観察しうる自己の側面に注意を向ける程度に関する個人差」と定義される。公的自己意識を測定する尺度としては、Fenigstein, Scheier, & Buss（1975）の作成した自己意識尺度が知られており、日本語版としては菅原（1984）の作成した尺度が多くの研究で使用されている（後藤・向山・辻・黒丸・新田・村田，1989；北折，1999；岡田，1999など）。公的自己意識尺度を使用したこれまでの研究の中から、公的自己意識の高い者の行動特徴として、他者からの評価に敏感であり（Fenigstein, 1979）、他者の目を意識するがために自己表出の仕方をコントロールしようとする（Scheier, 1980）、などが報告されている。また、公的自己意識の高い者が高い対人ストレスを経験すると、相対的に対人不安感が高まるという知見もある（伊藤・丹野，2003）。

学校などの集団内におかれた状況において、「一人である人は変わった人だ」と考え、他者から同様な認知をされることへの恐れをもつ者は、他者から自分がどのように見られているかという関心が高いと思われる。したがって、公的自己意識の高い者は、「ひとりぼっち回避規範」も高いことが予想される。また、公的自己意識の高い者は、自己表出を抑制するという知見（井上・小山・金井・坂野，2004）もみられるため、友人グループに所属したとしても、自己表出を抑え、友人グループ内のメンバーに無理にでも合わせていこうとし、結果的にスト

レスの高い状況に陥ることも考えられる。上述の伊藤・丹野（2003）の知見から考えると、円滑に関わっていくとすることで友人グループ内で対人ストレスを経験し、かえって対人不安感が高まってしまうことになる。

(4) 拒否不安 また、菅原（1986）は、公的自己意識の高い人は、対人態度として「拒否されたくない」欲求が強いという傾向があることを指摘している。それによると、他者からの評価の方向性としては、他者からの肯定的な評価の獲得を目標とする「賞賛されたい欲求」と、否定的な評価の回避を目標とする「拒否されたくない欲求」の2種類があるという。このうち、「拒否されたくない欲求」の強い者は、個性を殺し周囲との軋轢を最小限にすることによって、集団の中に自分の居場所や役割を確保しようとする傾向がみられるという。さらに小島・太田・菅原（2003）は、この2つの欲求の強さを測定する尺度の作成を試み、「賞賛獲得欲求」と「拒否回避欲求」という2つの概念を見出した。このうち「拒否回避欲求」は、「嫌われたくない」「変な人だと思われたくない」など否定的な評価を回避しようとする傾向であり、一人であることを避け、誰かと一緒にいなければならないとする「ひとりぼっち回避規範」とも関連がみられると思われる。

(5) 孤独感 「一人である」という状態に関する概念として孤独感も知られている。孤独感とは、日常生活の中で、ふと孤独を感じるというような、広く認知された情動の1つである（廣岡・徳谷，2003）。Peplau & Perlman（1979）によると、「人の社会的関係のネットワークが、その人の願望より小さいか、心理的な満足感を低下させる時に生起する」とされ、「認知的くいちがいモデル」として対人的な孤独感を定義づけている。また、Rook（1988）によると、孤独感とは、一時的な状況によって規定される状況的孤独感と、状況の影響を被りにくい慢性的孤独感との2種類があるとしている。このうち状況的孤独感とは、学校に入学したり転校したりした時や、就職するといった社会生活環境の急激な変化によって、容易に引き起こされるものである（廣岡ら，2003）。環境移行期において、状況的孤独感とは誰にでも引き起こされるものであると想定されるが、「ひとりぼっち回避規範」の高い者は、一緒に過ごす友人グループを形成することで満足を得ることができるため、孤独感そのものは比較的早い段階で低減されると思われる。また、その後も日常的にできる限り集団で過ごすようにするため、ある程度の社会的なネットワークを常に有していると考えられる。そのため、「ひとりぼっち回避規範」の高い者は、日常生活の中でふと孤独を感じるということがあまり多くないと想定され、「ひとりぼっち回避規範」は、孤独感と弁別して検討す

必要がある。

「ひとりぼっち回避規範」研究の意義

従来の青年期における友人関係の研究においては、友人がいるかどうかということに着眼点がおかれ、学校現場においても、「クラスの中に一人でいる人がいないようにする」ということに目標が設定されていた感がうかがわれる。大嶽（2007）における事例的研究でも、遠足のグループ分けでどこグループにも入ることのできなかった子について、教師が他の生徒に、「一緒に入れてあげてね」と助言することにより介入している。しかし、「ひとりぼっち回避規範」の高い者は、友人グループに入っているからといって必ずしも円滑な人間関係が築けているとは限らず、居心地の悪さや当該環境における不適応感を感じている場合もあると思われる。むしろ友人グループに所属したとしても、その後の友人グループ内での様子を、教師は注意深く観察する必要がある。特に環境移行期において、「ひとりぼっち回避規範」の高い者は自分が所属する友人グループや行動を共にする人を必死になって探そうとする。そのようにしていったん友人グループを形成すると、一人ぼっちであるという状態を回避することができ、その段階では当該環境における適応感が高くなる。しかし、その適応感の高さは、友人グループ内で円滑な人間関係が保持されなければ低下してしまうことになる。「とにかくどこかのグループに入ることにこだわるがゆえに、友人グループ内のメンバーとうまくいかないことがあっても、そのグループにとどまり続けることになり、長期的に考えてみると、ストレスの高い状態に陥ってしまうのである。

従来の研究においては、いわば「客観的に見た状態として」友人グループに所属しているかどうかという点が、当該環境における適応状態を指し示していた。また、先行研究においては、環境移行期には対人関係不安が一時的に高まり、適応感が低いが、ネットワークを形成していく中で次第に低減されていくことが示唆されている（小泉, 1992）。この視点から考えるのなら、「ひとりぼっち回避規範」の高い者は、全く逆のプロセスを辿ることになる。そうだとすれば、環境移行期に一見適応的にみえる「ひとりぼっち回避規範」の高い者が、長期的に見れば危険因子を孕んでいることになる。そのような点から、「ひとりぼっち回避規範」を検討することは意義があると思われ、いじめや不登校がクローズアップされる現代社会の中で、学校教育現場に意義ある知見を提供できるということを提言としたい。

引用文献

- 朝日新聞西部本社（2005）. 11歳の衝動—佐世保同級生殺害事件— 雲母書房
- Baumeister, R. F., & Leary, M. R. (1995). The Need to Belong: Desire for Interpersonal Attachments as a Fundamental Human Motivation. *Psychological Bulletin*, 117, 497-529.
- Fenigstein, A. (1979). Self-consciousness, self-attention, and interaction. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 75-86.
- Fenigstein, A., Scheier, M. F., & Buss, A. H. (1975). Public and private self-consciousness: Assessment and theory. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 43, 522-527.
- 藤田英典・伊藤茂樹・坂口里佳（1996）. 小・中学生の友人関係とアイデンティティに関する研究—全国9都県での質問紙調査の結果より—東京大学大学院教育学研究科紀要, 36, 105-127.
- 後藤容子・向山泰代・辻平治郎・黒丸正四郎・新田愛・村田牧子（1989）. 自己意識に関する発達の研究（I）—Fenigsteinらの自己意識尺度を用いて— 日本教育心理学会第31回総会発表論文集, 217.
- 廣岡秀一・徳谷智美（2003）. 社会的状況が孤独感および対人認知に及ぼす影響 三重大学 教育学部研究紀要（教育科学）, 54, 121-129.
- 井上明子・小山徹平・金井嘉宏・坂野雄二（2004）. 公的自己意識と自己陳述が対人恐怖症傾向に及ぼす影響 ヒューマンサイエンスリサーチ, 13, 255-262.
- 伊藤由美・丹野義彦（2003）. 対人不安についての素因ストレスモデルの検証—公的自己意識は対人不安の発生にどう関与するのか—パーソナリティ研究, 12(1), 32-33.
- 北折充隆（1999）. 歩行者の交差点における信号無視行動とその態度との関連について—公的・私的自己意識も踏まえて—名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, 46, 197-204.
- 小泉令三（1992）. 中学進学時における生徒の適応過程 教育心理学研究, 40, 348-358.
- 小島弥生・太田恵子・菅原健介（2003）. 賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み 性格心理学研究, 11(2), 86-98.
- 町沢静夫（2001）. 「他人」を気にするのはやめなさい—人とつき合うのがラクになる— 海竜社
- 町沢静夫（2002）. 学校、教師、生徒のための心の健康ひろば 駿河台出版社

- Maslow, A. H. (1954). *Motivation and personality*. New York: Harper & Brothers. (マズロー, A. H. 小口忠彦 (監訳) (1971). *人間性の心理学 産業能率短期大学出版部*)
- 松井豊 (1990). 友人関係の機能 斎藤耕二・菊池章夫 (編) *社会化の心理学ハンドブック* 川島書店 pp.283-296.
- 三島浩路 (1997). 対人関係能力の低下といじめ 名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 44, 3-9.
- 三島浩路 (2003). 親しい友人間にみられる小学生の「いじめ」に関する研究 *社会心理学研究*, 19, 41-50.
- 三好智子 (1998). 女子友人グループに関する一研究—対グループ態度の評価尺度作成の試み— 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 2, 85-94.
- 三好智子 (2006). 青年期初期の同性友人関係が有する発達の意味とその性差について *プシケ* 5, 25-44.
- 森田洋司・清永賢次 (1994). 新訂版 *いじめ—教室の病い—* 金子書房
- 本山ちさと (1995). *公園デビュー—母たちのオキテー DHC*
- Murray, H. A. (1938). *Explorations in personality*. New York: Oxford University Press.
- 長沼恭子・落合良行 (1998). 同性の友達とのつきあい方からみた青年期の友人関係 *青年心理学研究*, 10, 35-47.
- 中村泰子 (1998). 女の子のトラブル解読法—思春期の普通の女の子の生活と心—月刊生徒指導, 1月号, 12-17.
- 南部真生・天野知宏・小野昌彦 (2002). 親しい友人との食事に期待すること *教育実践総合センター研究紀要*, 11, 207-210.
- 則定百合子 (2008). 青年期における心理的居場所感の発達の变化 *カウンセリング研究*, 41(1), 64-72.
- 小畑豊美・伊藤義美 (2001). 青年期の心の居場所の研究—自由記述に表れた心の居場所の分類—情報文化研究, 14, 59-73.
- 落合良行・佐藤有耕 (1996). 青年期における友達とのつきあひ方の発達の变化 *教育心理学研究*, 44, 55-65.
- 大嶽さと子 (2007). 「ひとりぼっち回避規範」が中学生女子の対人関係に及ぼす影響—面接データに基づく女子グループの事例的考察— *カウンセリング研究*, 40(3), 266-277.
- 岡田努 (1999). 現代大学生の認知された友人関係と自己意識の関連について *教育心理学研究*, 47, 432-439.
- 岡崎勉 (1998). 気泡のように発生する女子の問題行動—私の処方箋— 月刊生徒指導, 1月号, 40-43.
- Peplau, L. A. & Perlman, D. (1979). *Blueprint for a social psychology theory of loneliness*. In M. Cook & G. Wilson (Eds.), *Love and attraction*. Oxford, England: Pergamon Press, pp. 101-110.
- Rook, K. S. (1988). *Toward a more differentiated view of loneliness*. In S. W. Duck (Ed.), *Handbook of personal relationship*. Chichester: John Wiley & Sons, pp. 571-589.
- 酒井厚 (2001). 青年期の親密な他者との関係における信頼感 *ヒューマンサイエンスリサーチ*, 10, 79-93.
- 酒井徹 (1998). 女の子どうしのいじめ 月刊生徒指導, 1月号, 26-29.
- 佐野洋子 (1988). 友だちは無駄である *筑摩書房*
- 佐藤有耕 (1995). 高校生女子が学校生活においてグループに所属する理由の分析 神戸大学発達科学部研究紀要, 3, 11-20.
- 佐藤静香・畑山みさ子 (2002). 女子大学生の昼食時間への不安に関する調査研究—ランチメイト症候群検証の試み— *宮城学院女子大学発達科学研究*, 2, 81-87.
- Scheier, M. F. (1980). Effects of public and private self-consciousness on the public expression of personal beliefs. *Journal of Personality and Social Psychology*, 39, 514-521.
- Sherrod, D. (1989). The influence of gender on same sex friendships. In C. Hendrick (Ed), *Close relationships*. Newbury Park, CA: Sage. pp.164-186.
- 園田寿・井田良・加藤克佳 (1996). *刑事法講義ノート* (第2版) 丸沼書店
- Staub, E. (1972). *Instigation to goodness: The role of social norms and interpersonal influence* *Journal of Social Issues*, 28, 131-150.
- 菅原健介 (1984). 自己意識尺度 (self-consciousness scale) 日本語版作成の試み *心理学研究*, 55, 184-188.
- 菅原健介 (1986). 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人にみられる2つの欲求について— *心理学研究*, 57, 134-140.
- ヴィヒャルト千佳子 (1998). 先生に見えない女の子たち 月刊生徒指導, 1月号, 18-21.
- Watson, D., & Friend, R. (1969). Measurement of socialevaluative anxiety. *Journal of consulting and*

- clinical psychology*, 33, 448-457.
- Wong, Marria M, & Csikszentmihalyi, M, (1991). Affiliation Motivation and Daily Experience Some Issues on Gender Differences *Journal of Personality and Social Psychology*, 60, 154-164.
- 山本淳子 (2007). 教師の視点からみた思春期の子ども
の評価懸念に関する研究 香川大学 教育実践総合研究, 14, 93-100.
- 山本淳子・田上不二夫 (2001). 評価懸念に関する文献研究と今後の課題 教育相談研究 (筑波大学教育研究科 カウンセリングコース), 39, 37-46.
- (2008年11月5日受稿)

ABSTRACT

The study of social isolation avoidance norms

Satoko OHTAKE, Toshikazu YOSHIDA

The present study reviews the previous studies of an avoidance norm for feeling alone in a peer group. First, we pointed out two characteristics on interpersonal relationships of a peer girls' group on the adolescents school life. This is the high closeness and the high exclusivity. The background of these behaviors had been indicated that there is social isolation avoidance norms, which they think they must be with someone and not to be alone. When it is in their social environmental transition period, they try hard to make an effort at forming a peer group by social isolation avoidance norms. But their peer group is not always an easy peaceful place. Because they will be too sensitive about other members to maintain their good relationships, for there is a possibility that they easily become to get into a kind of an over-adaptation. And it is predicted that prospectively there are some possibilities that those who have high norm awareness get into a high stress for interpersonal relationships of a peer group. Then we have also explored several conceptions which enclosed the social isolation avoidance norms.

Concretely, it is affiliation motives, public self-consciousness, sensitivity to rejection, and loneliness. And it is confirmed that social isolation avoidance norms is one conception from a new point of view which it can clearly distinguish from previous conceptions. It is suggested that the study of social isolation avoidance norms can give several significant information in the educational field now holding many problems.

Key words: social isolation avoidance norms, a peer girls' group, adolescence, interpersonal relationship